

大学の社会貢献プログラムと 図書館の連動

日本私立大学協会
平成17年度大学図書館司書主務者研修会

こんにちは、只今ご紹介いただきました国士舘大学附属図書館の植田と申します。いつも皆様方の大学には大変お世話になっており、御礼申し上げます。

(お断り:会場のNET回線の都合で資料を作成しなおしました)

今日は、社会貢献を大学や大学図書館の使命の一つとして捉えた場合、どのような可能性が展開できるのか、をここで一緒に考えてみたいと思います。

そのため、まずは図書館を取り巻く社会情勢がどうなっているのかを概観したいと思います。

次に、社会貢献のいろいろな取組の中から典型的なケースを選択し、大学図書館がこれまで努力してきた軌跡を追いながら、今後に力を注ぐべき道筋、クリアすべき課題などを拾い上げ、図書館の社会貢献という切り口から大学図書館の近未来を概観してみたいと思います。

最後に、大仰なモノでなくすでに実践されている身近な事例を拾い、図書館が行い得る地域社会へのより発展的な社会貢献の可能性を展望してみたいと思います。

1. はじめに



社会の変化



資料 (.doc Foemat)

資料: CNN記事要約



大学の変化



図書館への期待

Kokushikan University Library 2005

はじめに、話がわき道に逸れて恐縮なのですが、図書館界に強く影響すると思われる、ウェブの情報検索ツールを提供している**米国google(社)**の最近のホットな論争を話題に拾ってみたいと思います。(google資料:2005.08.03、CNNニュースをクリック)

ここでは、いわゆる米国の幾つかの大学と公共図書館などの蔵書をスキャンしてデジタル化し、現物の本はリポジトリ機関に保存し、図書館の棚を空けるという事業を始めたというニュースです(資料:要約をクリック)

しかし**bookless**をgoogleが進めると発表したら、早速出版社や学会などいろいろな団体から抗議などの抵抗があったと見え、今月半ば頃(2005. 08. 15?)の同社のブログでは、一時電子化作業を中断し、関係の理解に努めるといっています。11月まで冷却期間を置いて再開ということでしょうか?

どうして、このような展開になるかを考えてみますと、市民が望む方向では本のデジタル化というニーズのウェイトが大きいということだと思います。単なる売名やデモンストレーションではなく、ますますそういう状況が顕著になってくる、という確たる見通し(ビジネスとしての)を持ったからだろうと考えられます。

もう少し、そこに至るまでの状況、これまでの変化を見てみたいと思います。

googleデスクトップ (平成12年度の当館kissのパーソナル版開発計画は似た発想であった)。

google earth (MSのEarth Mapと同じ発想か?)

すなわち、デジタル情報の便利さと情報相互の関係づけ、情報集積などすべてビジネスとして成り立つ(**e-Journal**のように)ことを体験した、つまりブロードバンド社会の新しい事象のひとつが見えてきた、すなわち、情報デジタル化のスパイラルに完全に突入したと捉えるべきではないでしょうか。

ブロードバンドで、どんな情報にも即時にアクセスできることで便利さは格段に増すのですが、それに馴染んだ利用者は、従来の図書館に対しては、極めて厳しい評価を下すことになる。その便利さにも対応しなければ、社会貢献どころか市民にソッポを向かれかねない。

ここではまず、変化への対応という、図書館がかって経験したことのない重要な局面の真っ直中にあるということをご理解頂きたいと思います。

資料: CNN記事要約

- googleが大学図書館や公共図書館の蔵書をデジタル化することで協働し、図書館のブックレス化を促進
- 未来の図書館の実現に取り組んでいるのは、スタンフォード大、MIT、カリフォルニア大学各校、ミシガン大、バージニア大学など。
- 蔵書デジタル化や新技術の開発、永久保存可能な電子書籍のアーカイブ構築。
- スタンフォード大では5年以内に工学部図書館から実際の本を無くしたい。(同大学術情報リソース担当デレクターのMichael Keller氏)
- 図書館では、インターネット利用の他、電子化された何百万もの業界紙、学術論文、学問研究結果、870万冊の書籍閲覧が可能になり、データやあらゆるドキュメントを視覚的表示するソフトウェアの開発、シミュレーションなどあらゆるコンテンツ再生などのプラグインの利用を考えている。
- 東ではMITが、5年前からデジタル化されたあらゆる種類の資料を「D Space」と呼ばれるリポジトリを運営し、保存している。
- デジタル化に向けた最大の課題は、出版社、特許・著作権者の権益保護と許可の取得。





社会の変化

- 国際； 環境保護、循環型社会基本法
- 地域； 官民協調による地域活性、u-japan政策
- 企業； リスクマネジメント、業務プロセス改革
- 社員； ワークスタイル革新、ナレッジ継承
- 顧客； CRM、ユビキタスコマース



ユビキタス時代＝情報のみではなく、ヒト・モノ・環境をオンラインで捕らえる（センサーとSDRでon line）

※SDR statistical data recorder



Kokushikan University Library 2005

国際社会の話題では、ビジネスや政治活動の中に取り込まれつつある自然環境保護があります。ここ数年で顕著になってきました。（資料クリック）[自然保護を人類共通の価値観に築きあげようとする動きが、国際社会の永遠のテーマになったのです。](#)

地域社会では、地域の活性化のため、学術・技術、芸能などの個の動きを空間の動きに変えていく諸政策が目白押しです。そして、各レベルでeなんとかというICTの戦略的展開が顕著に出始めました。

企業では、相次ぐ不祥事を含め、ビジネスを止めてしまうあらゆる危機の管理手法が問われはじめて来ています。業績や生産性戦略も大切だが、社会貢献という情報共有がビジネスに反映することから、コンプライアンス、ビジネスエシックスを含むリスクマネジメントが喫緊課題になってきています。

社員のレベルでは、公私を問わず他のコンピテンスに学びながら自力でスキルアップを計っていくという厳しい状況になっています。仕事で常にその数値的な成果が求められ、就業環境・形態が多様化してワークスタイルが激変している。また、2007年問題である団塊世代引退後の組織スキル継承問題などがクローズアップされています。

顧客レベルでは、明らかに個別サービスの徹底、いますぐ、あなただけに、そこへサービスする、というユビキタス時代になったことによって、自己への優先・差別化を求める顧客に変化している。

従ってこの先、情報だけでなくセンサーやコンピュータ、携帯、ICカードを介して、ますます個別特化のマーケティングが展開されることは必然と考えられる。IPv6時代とは、機関や家庭のあらゆる電子機器がネットワークに接続されることを可能にします。GPSで位置情報、fericaカードでいまや行為、購買、手段、嗜好などの分析がリアルタイムに可能になり、手法はリアルマネジメントに移る。

そういう時代において、図書にICが載っていないから相互貸出しできない、手許にすぐ届かない、オンデマンドでは本が読めない、質問や苦情の相手が用意されていない、自分専用リポジトリが無い、などビジネスの世界ではクリアされている要求が、図書館では通らないことを当然として、いつまで通用するだろうか、それを問題として捉えられない図書館関係者が市民と価値観を果たして共有できるのか？

在宅で仕事や学習に一所懸命な利用者サービスや、来館者の多様な問題解決の支援に対して、大学図書館はいつまで距離を置いていられるであろうか？変化は止まらないのに、である。



■ **生活者のニーズを基盤とした課題の解決**

医療や環境などの安全・安心, ICT産業の活性化

■ **ICT産業の活性化によるユビキタスネット社会の基盤構築**

ダイナミックなeビジネス・コラボレーションの実現、IPv6への移行やセキュリティ確保などによる情報家電などネットワーク化への対応、コンテンツの潤沢な流通・自由で安全な利用の促進、人材・企業の育成

■ **ユビキタスネット社会における障害や不安の解消**

プライバシーの保護、情報セキュリティの確保、電子商取引環境の整備、違法・有害コンテンツへの対応

(資料)



大学の变化

- **環境**; 景気低迷(低金利、寄付金減少)
学校数の増加、18歳人口減少
- **制度**; 補助金傾斜配分(COE・GP:競争的補助拡大)、
国大 独立法人化(人事異変)
- **ステークホルダー**; 選択肢増加、評価(付加価値)

➡ 教育改革

大学の質を担保(第三者、認証評価と格付)

人材の質を担保(出口管理、教育プログラム)

教育の質の保証(学習者の保護と目標達成度の評価)



Kokushikan University Library 2005

この辺りは、昨日の協会小出事務局長および新潟青陵大の関理事長様などから詳細な説明があったところなので、大幅に割愛したいと思います。

社会やビジネス、技術などが激変する、あるいは変化速度を速めた場合、そういう状況下では人材が追いつかないという問題が起こる。学生などは、学習すべき内容のボリュームが大きすぎて恒常的な消化不良に陥る。こういう状況の中でも、社会は次の変化にどんどん移っていくので、組織のスキル不足＝人材の枯渇となる。

企業は、社員研修だけでは賄い切れない人材育成を、必然的に大学に持ち込んでくることになる。国民経済の死活問題ともなればリスクシフトに動き、対応できない大学は、評価とかランキングによって存在価値を認めてもらえない。

本当は、18歳人口減よりも深刻な大学改革問題がここに存在する訳です。

これまでのように、単位を取った学卒という資格取得者ではなく、問題解決能力の高い＝人間力の高い人材が求められ、それゆえ大学は、教育プログラムを変更しかつ実質化する条件整備が必要になったのである。

いまや、教育の世界でも成果・成績が社会にさらされる。これは怖いことです。それゆえ出口改善だけではすまない→卒業後もたゆまなく影響を与え続ける学習支援機関→それが生涯教育への対応です。卒業生支援とは、それが必要になったとき情報または学習・研究知財をそこへ提供できることです。そう考えると、それは情報センター部門の仕事ですか？教務部？生涯学習センター？否、そんなこと大学図書館以外に出来るどころが存在しないのではないのでしょうか？

皆様の図書館、その心構え如何ですか？ここではそのことを指摘させて頂きたいと思います。



図書館への期待

- **読書環境**; シェークスピアと静謐・癒し、永続的に安全・安心
- **学習環境**; コビキタス、容易、生涯学習
- **教育環境**; 本質を捉える知へのアプローチ
- **研究環境**; タイムリー、稀少資料、局所&WW、e-Journal
- **サービス**; 高効率サービス、地域公開、問題利用者、コミュニティ、bookless
- **資料・知財**; 情報保護(著作者保護、資料永続性)



全方向的サービス

= 情報化社会における図書館への期待

Kokushikan University Library 2005

ここでは、時代や社会の変化が図書館に突きつけているモノ、それを考えたいと思います。

結論から先に申せば、「大学の教育改革や、生涯学習社会(どの年齢層に置いても、たゆみなくスキルアップを強いられる社会)を支える実体がある図書館」であります。

資料の収集・蓄積・提供から、大学のコアコンピタンス、あるいは地域社会の教育基盤として全方向的な学術情報サービスを実質的に提供できる体制と申しましょうか。それはこれまでの図書館機能に加え、スピーディで効率のよい問題解決へ誘導する機能、知的生産者と生産物の安全・保護機能、ドラスティックな知的生産・創造へのナビゲータとなりうる図書館を指します。

これに代わる価値観が見いだせても、知的情報活動を支援するという本質を捉えている以上、やがてここへ回帰すると考えられます。

しかし、そこでは身近なところに壁があります。

→ 高度な専門職業人としてのレファレンサーの確保

+ 高度情報化(ネットワークと学術情報リポジトリの高度な性能を担保するもの)

2. 社会貢献プログラム

■ 社会貢献とは

何がおこっているか



■ 大学における社会貢献

ミッション

エクステンション

サービス



Kokushikan University Library 2005

次に、ここでは「社会貢献」概念を確認しておきたいと思います。
(何がおこっているか→クリック)

(戻って)

それでは、次に、大学あるいは大学図書館がそれをどう捉えていくかに言及したいと思います。

まず、社会が大事と認める価値観とは「人類の永続的な平和発展のための自然保護」にあるということですが、大事なことはそれへの貢献度を大学がどう捉えて具現するかであります。

まず、これまでの対応から考えて、3通りの態度があると思われます。

まず、ミッションとして実践する考え方。このとき大学を人材育成という機能で捉えてみた場合そのコンセプトは、「課題解決型高度職業人の育成を、全就業年齢対象に実践」する、というケースになります。

次に、エクステンションとして実践する考え方。このときは「生涯学習支援」、と言うケースでしょうか。

最後に、サービスの一環とする考え方。このときは、「学術情報・資源の提供」ということになります。

ここで、現代社会の要請と大学の教育改革との間で矛盾がないのは、ミッションという捉え方のみである、という事実に着目して頂きたいと思います。

社会貢献とは



- 消費者が自分の価値観に合った企業の商品をもとめ、結果的に個人レベルの社会貢献を志向
 - 社会貢献度のイメージが悪ければビジネスのダメージになるという情勢を構築
- 自然環境など、地球規模で必要な保護活動へ参画
- 大衆が大事に思うモノを育成・保護する
(価値観共有志向)



Kokushikan University Library 2005

いま社会で起こりつつある価値創造は、やはりCNETニュースから事例をあげますと。
(資料:クリック)

いわゆる、自分の価値観に合った選択ができる社会を構築していく。そういう方向へ確実に動いている。そういうことでもあります。市民が大事に思うもの(=共通の価値観)を育成し保護すること。価値観共有志向であります。

そして、繰り返しになりますが共有すべき価値観の筆頭が、人類の永続的な平和発展のための自然保護にあります。そのための人間力、知恵、時間というものが大切という展開であります。

つまり、企業活動が、「利益」や「顧客創造」によって経済や各種製品の生産面で地域社会に寄与しても、自然の破壊や公害を招いてはダメ、自然への配慮を担保した上で企業活動であらねばならず、そのうえボランティアなり、NGOや教育機関への寄付などで具体的な社会奉仕を行う。さらにいうならば、市民や自己の欲求の実現に協働できる相手に成りうること。そういう企業イメージが理想として、ブロードバンド時代と共に鮮明になりつつあるわけです。

自分の社会的価値観に合った企業の商品を購入できる新しいオンラインショッピングサイトが、米国時間22日にオープンする予定だ。

Alonovo.comで商品購入を検討する際に、自分にとって重要な社会的価値観や環境問題などの情報を入力すると、商品を提供する企業のその分野における貢献度が表示される。この貢献度は、KLD Research & Analyticsから提供されるデータを利用して表示される。ユーザーはこれを利用して、各企業の状況を比較することができる。同サイトで対象となるテーマは、労使関係、動物愛護、公正取引、慈善寄付、クリーンエネルギーの利用、リサイクルなど。販売はAmazon.comのサイトを通して行われる。

ラテン語でalonovoとは「持続可能な変化」という意味だ。同社は、取引1回につき5～7.5%の手数料を得るが、そのうち20%は、商品の購入者が選んだ非営利組織に寄付される。対象となる組織には、赤十字、The Sierra Club、UNICEF、Global Exchangeなどが含まれる。



(資料)

大学における社会貢献

- 人材育成とステークホルダー指向
即戦的で問題解決型人材育成、評価(出口調査)
- 生涯学習インフラ
学習・研究の生涯継続を担保
- 地域公開
活性化のための知のコミュニティー(連帯)と場の提供
- 知財公開と産官学連携
創造の連鎖に繋がる知財生産→公表と作者の権益保護



社会貢献活動が生み出す価値を大学自身が説明できるよう、どうい社会価値を創造するかの戦略がなければ大学評価に結び付きにくい。

→大学のアカウントビリティーを担う一翼に、図書館を位置づける

Kokushikan University Library 2005

今度は、こうした視点から大学の社会貢献の実践について考えてみたいと思います。

まず、これまでの一般的な実績を観てみましょう。(資料:クリック)

いま、ピンポイントで、現象を概観してみました。これらへの足並みは、その大学なりの戦略的課題でありますから、ここでは批評は避けたいと思います。

ただ、大学のステークホルダーが、只今まで述べてきたような変化する社会のマドから大学なり図書館なりを観察しているとき、そこにはもう既に違った目があることを、ここで感じ取られたと思います。それが、コンセプトを組み直す=大学改革の一つの動機と考えねばなりません。

大学改革のソリューション=社会貢献と捉えた場合、具体的にはつぎのような課題に正の連鎖を誘導することです。

人材育成 → 多様化によって学力のレベルが均質化されてない→人材のアンマッチ、ニートなど、社会への適応性欠如などに対しGPによる具体的な対応を行う。

教育改革 → 学力よりも問題解決型人材育成へ。どんな工夫や教育で具現しているか？
納得できる方法が見える形に。見えなければ、失望。

生涯学習 → 本来学習とは永続的な性格を帯びた行動。時代や問題それぞれの節目にどう同期させていくか？を具体的に示すのが生涯学習機関。
カルチャーセンター的な主催側主導の公開講座万能時代は終焉。
キャリア形成、教育情報管理のほか、QuickPointのようなタイムリーで
専門的な質疑応答や、Q&Aデータベースなど、機会を逸しない対応が必要

情報・課題共有 → 人から学ぶためのコミュニティーの形成、場の提供は？
創造活動のインセンティブ=作品の公開と広報、権利保護等の対策は？
→情報管理は、特許代行などの積極策も盛り込む
つまり、貢献を形に→個人では叶わぬことを大学が協働または
肩代わりする準備が必要

このとき、これらの事業展開に極めて重要な価値創造、知財が生産される可能性があり、図書館はその内容をきちんと蓄積し発信する役割を負います。つまり、アカウントビリティーの一翼を担当することです。

3. 図書館の地域サービス

■ 図書館の地域公開



公開の内容(開館時間、パッケージ資料の融通性、電子資料量、利用者教育)

■ 社会連携(問題解決支援)

学習コミュニティの構築 例:地域交流プラザ(広島大)

■ 生涯学習

サービスの永続性と教材の質、e-Learningと情報支援

■ 地域知財保護

事例: 関西大学 東海大学 etc.

Kokushikan University Library 2005

ここでは、図書館がこうした変化のなかで、これまでどう奮闘してきたか、その軌跡を点検したいと思います。

ここから見えたことは、大学のミッションに対して図書館がどう連動したか?ではなく、図書館として何が出来るかという立場からの努力・工夫ではなかったか、ということであり、それは、これまで大学は産官学協働、→ 図書館は地域サービスという図式が理解されやすかったからでしょう。

だから、内容が地域特性と関連なく不均質であっても一応の「地域公開」でも落ち着いた。そのサービスレベルにあっては、学習コミュニティ・eラーニング、知材管理など新しく必要になってきた機能は、当然ながら図書館は蚊帳の外に置かれてしまう。しかし今や多くの大学図書館が、膨大な学術資料を所蔵し、あるいは世界の情報に即座にアクセスできるネットワークや、GS室、AVホールなどという少人数コミュニティ機能をもち、図書館が地域の重要な学習拠点になりうる基盤を持ったわけです。そうであるにも拘わらず、現実には大学図書館が様変わりして便利になったという現実社会からの認知度が低い、妨げとなるさまざまな障壁に拒まれている。

例えば、数多の学習(補助)図書・雑誌が図書館資料であるのに、eラーニングの学習教材など各種ソフトウェアは、そうならないという現実。

e文書法施行下においては、タイムスタンプによって後日文書の真正性の証明が可能になっても、データの個別属性管理が不可だからコンテンツの権利保護ができない、とか?

一事例から乱暴な結論を導くことはできないにしても、もし、そうなら図書館主務者らのおおいなる誤解が、既成の地域サービスで落ち着かせ、市民要求に沈黙して図書館を失望させていたということになりはしないでしょうか。

少なくとも、変化への過程には一度、視座を変えてみる必要があります。

4. 大学図書館の視座

■ 社会情報基盤(図書館のミッション)

学術、ビジネス・地域生活情報のリポジトリー

■ ブロードバンド(依存のインパクト拡大)

広域・高品質メディア情報へのアクセス

■ モバイル(利便性のインパクト拡大)

ユビキタスなパーソナルサービス

■ 知財管理(政策転換への連動)

知的生産経済政策に寄与するアーカイブ

どこでも
いつでも、だれでも
↓
ここへ、いま、私に
○○○を、

Bottom': 技術・制度的に可能になったこと → 未対応 → 不満

Kokushikan University Library 2005

国公立大学図書館協力委員会の資料などを見ると、これまでの図書館機能説明などで言っていた「図書資料の収集・蓄積・提供」という記述が激減し、「広く学術情報サービス」という概念でその役割を表記する傾向が明確になってきました。

しかし、語義の解釈が個々人の曖昧さに委ねられると、そのことによってフィジカルなものよりライブラリアンの意識レベルでの温度差を益々拡大する訳です。それが独自性と言えるうちは良いのですが、社会の価値観と離れると不満が増幅し、それが図書館イメージとして一般化すると、図書館の危機に繋がります。

ここで学術サービスのキーワードをいくつか拾い、次代の大学図書館イメージの参考にして頂きたいと思います。

認識格差の大きいキーワードは、大きくご覧の4項目に顕著に現れていると思われます。

情報基盤に対する認識:例えば、いま利用者に本当に必要な資料・情報がコレクションされているか、またはアクセス可能になっているか?否でも、まあまあ容認してもらえる程度なのか?図書館はいまや、多寡は別として、学術や生活など領域の区別など許されない情報のリポジトリ機能が必要である。

ブロードバンドに対する認識:ブロードバンド時代なのに、文字しかもパッケージソース(印刷物で流通した情報資源)しか期待できない、と思われていないか?マルチメディア、しかもセットデータによる自動再生機能が保証されたアーカイブは可能なのか?文字情報とは理解度という点で情報格差という新たな問題が生じているが図書館の対応は?

モバイルに対する認識:貸出予約や購入希望図書、資料のデリバリー申込み、クイックレファレンスなどは、技術的にはモバイルの方が便利で効率的。また、学術情報資源もメディア内容がキャラクターであるなら技術的にはモバイル伝送可能と誰もが考え始めている。不満の原因となる根本に、図書館はどうして対応が後れるのか?がある。

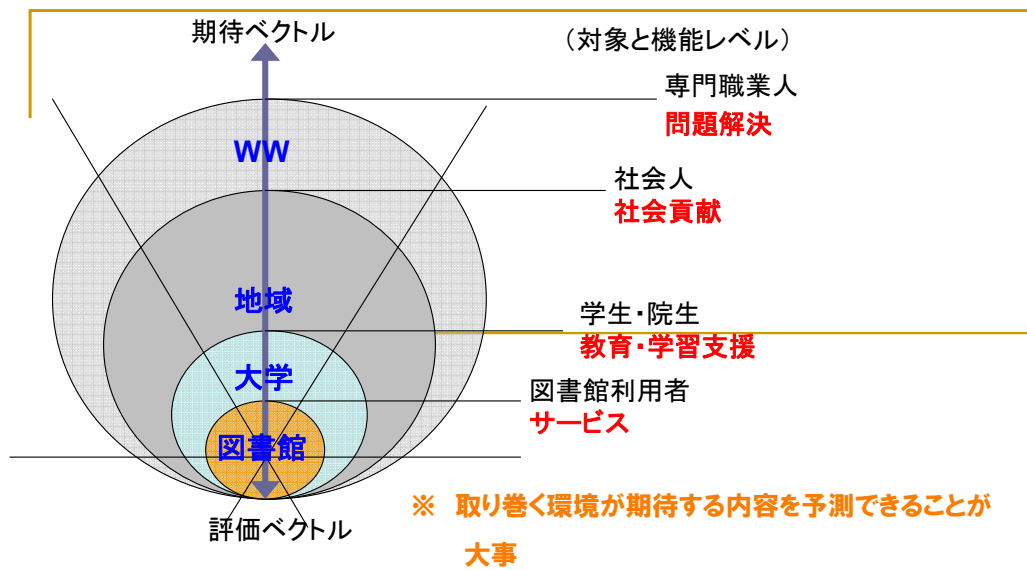
知財管理に対する認識:これは学内他機関の問題なのか?自分の作品を知的財産として認めてはもらえないのか。それで、本当に創作活動を奨励していると言えるのか?著作物等の作品、オリジナリティーはどう取り扱われるのか?学術情報のリポジトリとは、こうした諸々を担保することではないのか?

こうした市民の常識的な要望に応えるためには、視座を、大学の場合と同じように社会の価値観においてワールドワイドな視点によって変化させることが不可避なのである(次図評価イメージ参照)。

いまや図書館に代わって、「こうした視座で物事を捉えている商用サービスが、オンラインや検索技術という形のネットワークビジネスとして既に実現している訳です。こういう便利さの恩恵の方が図書館より大事にされつつあり、評価やコストの点で格差が結果的に徐々に拡大している訳であります。

あらゆる付加価値情報(アーカイブ)のリポジトリをあらゆるメディア、手段で提供することは、図書館のパブリックサービスである(ミッション) → こう社会が熱望しているのに、温度差としてこれらの図書館課題を放置することが許されるのでしょうか?最後に今日はこのことを提言しておきたいと思います。

図書館の評価イメージ



Kokushikan University Library 2005

(資料: 視点をどこに置くかがレベルを決定)

5. 社会貢献連動の課題

■ 情報提供

コレクション&データベース、容易なアクセス

■ 人材育成

問題解決のための情報ナビ的レファレンサー、
教育支援シナリオライター&学習コンテンツデザイナー

■ 地域参加

ボランティア、共同企画

■ 自治体支援

区立図書館とのネットワーク、資料・施設共有

Bottom: 図書館または大学改革の枠組で社会貢献を考えると、時代への適応が難しい。
失望されないためには、社会貢献の枠組みから図書館を考える発想の転換が必要。

Kokushikan University Library 2005

しかし実際面となると、何もかも自前で用意することは当然不可能であります。この問題つまり、コレクションプランの難度を克服するためにも、著作権などの法制や物理条件によって拘束されている情報以外は、大学図書館の情報資源も当然オンラインアクセス(オンデマンド)が実現されることが便利な訳です。ここで大学図書館の相互協力を動員すれば、商用との市場競争でも優位になれる最大の強みがあるからです。

一方では、便利さがいわゆる情報過多とアクセスの複雑さという負の側面でもクローズアップします。適切なナビゲーションが無ければ大方の者が必要な情報にまで到達しないという、社会の方々の困難(情報リテラシースキル)にも図書館の人的資源を最大限に活用する必要が生じています。ここに、高度専門領域レファレンサーが必要になってきました。また、FDにも情報スキルは重要なポイントです。しかし、かなり大きい比率で教室や研究室がその要件を満たしていない現実があって、それが原因で授業改善が思ったように進まない。ここにも図書館の支援需要があります。すなわち、教員と協働できるコンテンツシナリオライター&デザイナー=ライブラリアンという構図です。乱暴なようですが、所蔵資料やアクセスの仕方、著作権法等関連知識やコンテンツ制作技術を熟知するパソコン屋などは大学の他の職場には存在せず、ここでもライブラリアンが一枚加わる必要がある。こうした人材育成という課題もあります。

また、学術情報はかなりの比重で生活情報・ビジネス情報・専門情報に近接しています。情報活用が弱いために地域が活性化しないということであるならば、地域市民の諸活動と大学図書館の連携という形を作らなければ、大学図書館の公共性に照らして恥ずかしいことであります。大いに地域に参画し、課題解決の知識情報を相互に蓄積すべきであります。

つまり、市民生活を支える自治体を補完する大学図書館機能を有することが、大学図書館の将来に重要な意味を持つことと考えられます。なぜなら、大学図書館は公立図書館が弱い専門情報に強いからです。こうした図書館相互協力があって、社会事情に疎遠な大学図書館司書らの視界が広がります。つまり、より現実的な問題解決能力が磨かれることが期待できます。また、自治体はまだマルチメディアをカバーする知財リポジトリに弱い、という実態があります。これには施設・設備共有が考えられる筈です。色々なメディアのアーカイビング能力を持たない公共図書館をこうしてカバーし、大事な地域資産を商用に散逸させたりせずすみ、資源や地域知財の保全に寄与することが出来る。こうした大学図書館が地域と協働できる制度的な確立が必要です。むろん大学図書館側にもメリットがあります。ライブラリアンのより豊富なキャリア形成、社会貢献の実感によるモチベーション維持などへの影響であります。

6. 市民に身近な大学図書館へ

■ 地域連携事例

 せたがやeカレッジ

 世田谷6大学コンソーシアム

 国士館大学附属図書館

Kokushikan University Library 2005

それでは、私どもの事例をここで紹介したいと思います。あまり自慢できるような、大仰なことをやって居るわけではありません。ただ、大学図書館の沽券とでも言いましょうか、これまでとは違う態度があるということを、ここから感じ取って頂きたいです。



事例 **せたがやeカレッジ**

■ **せたがやeカレッジ**

ホームページと運用事務局



■ **当館との協同**

学習コンテンツの制作支援、シェア

■ **今後の課題**

コンテンツ開発支援環境の充実

コンテンツ開発(知財の生産性)

人材教育・ボランティア育成



Kokushikan University Library 2005

平成15年の春、世田谷区教育委員会が、珍しく本学図書館に見えられ、富山県など幾つかの自治体で事例がある「インターネット塾」というeラーニングサイトを立ち上げたい、という相談を受けました。そこで、当館だけでは荷が重いので、世田谷区内諸大学全部に呼びかけたらどうでしょう、という提案をしたところ、早速協力を呼びかけ、結果的に世田谷6大学コンソーシアム参加校の5大学が協力に応じられた、ということになった訳です。目的は、世田谷区は教育を重要施策としている区なので、区民の知的要求や学習欲求に応えられる政策を展開し、区や街の活性化、区民サービスの向上を図りたい、ということでした。

具体的な協力の形態は、区が発信するeラーニングコンテンツの製作支援です。

ところが、各大学とも未だそういう体制が成熟しているとは言い難い状態だったので、結果的には、各大学等が開発したeラーニング教材を提供する、という形になっています。幸い当館は、最後にお見せすることになっていますが、マルチメディアデータベースというものを3年前から持っていて、この中にeラーニング素材が幾つか蓄積されておりました。これを評価して頂いて、このうち提供して欲しいというものがあれば、その著作者等に提供の許諾を得る、という形ですぐに協力できたわけです。なあんだ、そんな程度のことか？として、これが稚戯・矮小と思われるのは心得違いであります。

市民がこの便利さに気づくには時間が少し必要になるのであって、活況になって、リクエストに応じたコンテンツ配信が可能になれば、地域教育基盤は格段と向上し、地域優位性の一大要因になります。そのとき本学大学図書館は、学生だけでなく社会の要求に対応できる教育力の高さ、GPを証明できる訳であります。

また、この進展によって、大学知財が教育・研究だけでなく、ビジネスとして展開する可能性も見えてきます。

大学による生涯学習・エクステンションが図書館に支えられているという証明にも成りません。当然現在は、その為にいくつか課題を抱えているわけでもありますけれど...



事例 世田谷6大学コンソーシアム

■ 図書館の相互利用



■ OPAC横断検索



■ 今後の課題

学生の相互利用への道のり
館間相互協力(現物の館間貸出し)
知財管理、アーカイブの共有
遠隔コラボレーション



Kokushikan University Library 2005

次に、「せたがやeカレッジ」の協力母体となっている6大学コンソーシアムをご紹介します。

実は、私を始め多くの関係方々が正直申し上げて、この図書館コンソーシアムの展開が遅いことで幾分いらだちを感じている部分があります。いわば、社会と図書館の乖離を象徴しているような部分なのですけれど。

国内には、皆様の図書館の中にもお見受けできると思いますが、今この事例より実質的なサービスがたくさん展開できていることを承知しております。

しかし、このコンソーシアムにはそれを超える展開への熱情が、どうも感じられない。お隣り近所のおつきあい、とでも揶揄していいのでしょうか？情報化や相互協力のレベルで温度差が大きい地域が、善良な市民から情報格差という負の評価を下されるまで、どのくらい時間が残されているのでしょうか？

いまや我が国は世界一のブロードバンド先進国家な訳であります。急速に事態は進展しています。市民が実態を把握することは、予想以上に早いだらうと容易に予測できます。

そのとき、現在の停滞事由が納得頂けるかどうかは甚だ疑問です。市民の信頼失墜に繋がりがねないと思います。逆説的には、ブロードバンド社会とは、好むと好まざるとに拘わらず大学図書館の存在感・期待をそれほどに高めてしまう状況を拡大しているのです。

ここで、こうした事態の対応のためにいくつかの課題を示しておきたいと思います。



事例

国士館大学附属図書館

- “kiss”によるメディア・アーカイブの特長
- メタ情報をモバイル検索へ
- 元情報(メディア)の永続性、真正性証明
- 今後の課題

バージョンアップ

コンソーシアム

保護と料金決済

[戻ってから→おわりに\(click!\)](#)

Kokushikan University Library 2005

次に、こうしたユニークな図書館の諸活動の基盤となった、当館が開発・運用しているマルチメディアデータベースについて説明させていただきます。

(→ 図説明 デモMovie再生)

(戻って)

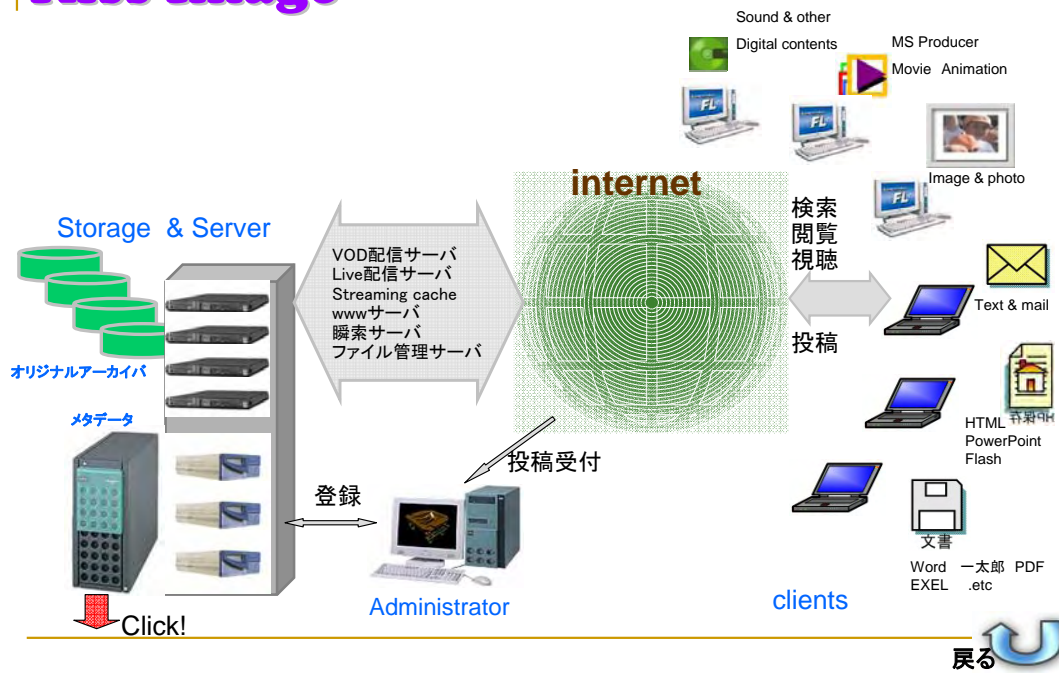
当館は、ネットワーク社会の原理原則のところ、「インフラのないところには、草木も生えない。まず、環境ありき」と考えてきました。その結果、他の方法や依存では実現できないという結論からこういうモノまで作ってしまった。欧米では当たり前と思われませんが、日本の国公立大学図書館では、極めて新しい動きだったと思います。ブロードバンド社会における市民の学術情報要求に応えられる、あるいはその為には必須のインフラを唯一整備したと位置づけています。

このシステムの運営によって、いま当館は、大概の可能性について、技術的にクリアできる試行なら大方経験を済ませています。例えば、データベースの構築、全学紀要・論文の全文公開、注目のフルテキストサーチ、理想的なマルチメディア情報の一元化、遠隔レファレンス(TV会議方式、ウェブ送信方式の2通り)、自製HPの運用、ストリーミングコンテンツの配信と制作、教材製作、ムービー編集と編集室整備、ライブ配信(活動発表、遠隔学習・講話)などがその一例であります。

今後、現存する課題の大方をクリアする体制も既に構築されている、と考えています。できるけれど、いまは社会からの要求が出てくるのを待っている、という実情もあります。それは、どこもやっていないことは、例えどんなに便利でも、仮に当館が実現できたとしても期待値が小さいからです。いま、こうしたニーズ開拓を含め試練を迎えています。

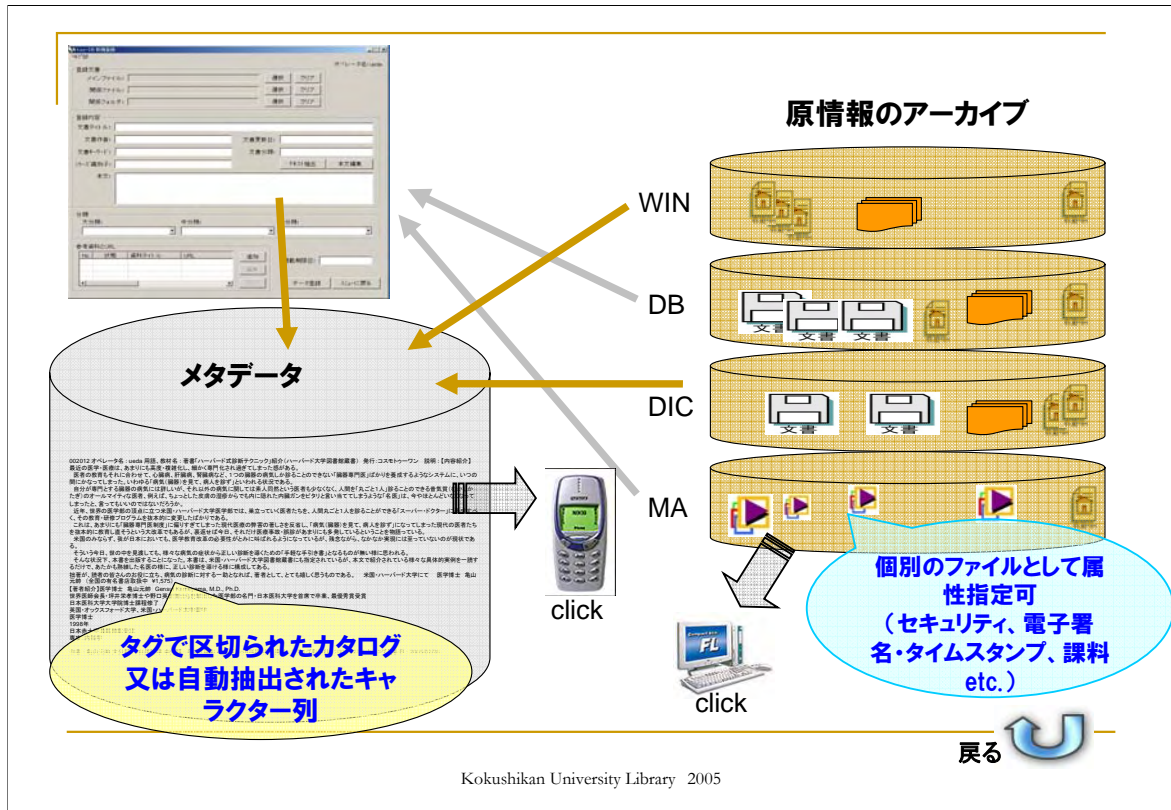
ここでいくつか、将来計画を含めた課題を紹介しておきたいと思います。

Kiss Image



Kokushikan University Library 2005

(資料)



(資料:kissの情報管理方式)

Kiss (Knowledge Integration Service System)



Kissモバイル

実現するパーソナル・サービス

書店にて→この本図書館にある？(買わなくていい？)

在宅学習→もっと沢山勉強したい。
どんな本が？

生涯学習→関連論文・資料は？
(記事検索)→デリバリ要求

企画書づくり→市場調査、コンテンツ作り教えて(ビジネス支援)

問題解決→関連法基礎知識、
えっ、この用語わかんない？

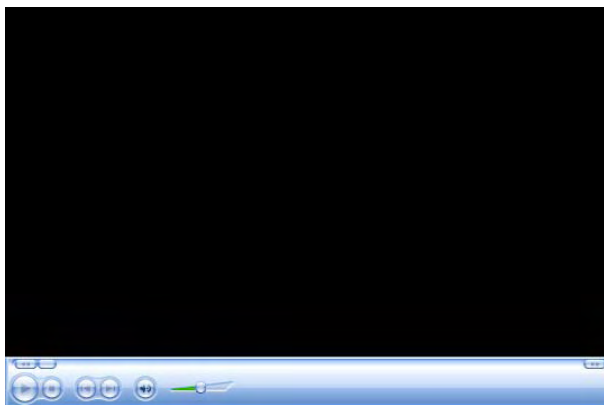
Kokushikan University Library 2005

(資料:モバイル検索例のデモ動画;フラッシュ)

Kiss (Knowledge Integration Service Systems)



- トコード体系、言語、形態素に依存しないキーワード。
- ト高速全文検索
- ト半自動記事カタログ作成
- トオリジナル保存→形式変換自在(情報の永続性担保)
- ト情報の件別属性指定可
- トセキュリティー、電子署名、タイムスタンプ(真正証明)、
- トシステムが簡素・廉価
- ト情報管理負荷極少、操作性
- ト情報のセット登録可(学習コンテンツなど)



Playerを右クリックして画面サイズを変えます。

Kokushikan University Library 2005

(資料:kissの特長、優位性)

7. おわりに

■ 大学改革の目が図書館に向けられる日

現状脱却し改革(変化)

または

大学の合理で埋没(衰退)

図書館を未来のグローバルコラボレーションの枠組みの中に

EndingServiceDemonstration: **Hasu**

Click!



Kokushikan University Library 2005

最後に

大学図書館が、大学のコアコンピタンスであるといわれて久しいと思います。何世紀その概念が支持されて来たのでしょうか。それがいま、大学改革に乗り遅れている？という指摘さえ受けています。(改革の)嵐の前夜だ、という期待の表れなののでしょうか？否、ブロードバンド社会到来によって図書館など余り必要性を感じなくなった、というご批判なのではないでしょうか？

もちろん、それは大いなる誤解・誤りであります。益々必要性が高まりつつある、ということは間違いありません。大学図書館は、学内でもっとも大きいスペースを割いて最も多い職員数を抱える、学部並み、もしくはそれ以上の予算を費消する一大組織です。学内で現状容認の価値観が共有され難い原因は、非常に厳しい条件下で苦しみながら教育改革を進めている関係勢力が一方にあって、図書館は大学が行おうとしている社会貢献に連動できないじゃないかという不満があるからだと考えられます。

社会の実態はリストラなどで極めて厳しい状況が沢山ありまし、大学経営も同様に厳しいので、それを口実に経費削減の最右翼と指摘されて不思議はありません。だから、図書館の対応が後れるとリスクシフトに動き、改革の強権発動さえ起こりかねないのです。

しかし一方、我が国のブロードバンドの進展は、図書館改革の救世主であります。

だからいま、地球規模の問題解決のグローバルコミュニケーションへの参加枠に組み込まれる可能性は、大学図書館以外にその体制がないという学内コンセンサスを確立すべきでしょう。よく大学は「新たな価値創造」ということを標榜しますが、その実現には、感動などを伴う社会や世界への貢献の実態とグローバルコミュニケーションへの参画意義などについて実感を与えることが必要であります。だから、その材料となる社会貢献の体験のリポジトリを図書館に実現することは、実は大学改革のキーになるのです。

しかし、どんなに便利で高度なサービスを展開しても、あてにされない、知らないでは無意味です。だから、市場形成の速度を速める工夫も必要になります。そして、現状でも重たい仕事にこうした膨大なものが組み入れられたら、図書館が堪えられません。その為には、最早過去の“独自性”という価値概念を払拭して“共有”に変え、我が国諸大学の知財・ナレッジを共有する**図書館ネットワークを構築していかなければ、時代や賑わいを見せる商用との競合に対応できない訳であります。**

「社会貢献」を実質化するこうした動きが、社会に与える益は甚大であります。

図書館の情報化や変革なくして社会貢献は果たせない。逆に、社会貢献という視座がなければ教育改革も図書館改革も成り立たない。それが、私が申し上げたい全てであります。

最後までご静聴有り難う御座いました。機会が御座いましたら、是非本学へも遊びにいらして下さい。おわります。

ilib-kiss コンテンツ事例



Playerを右クリックして画面サイズを変えます。

Kokushikan University Library 2005

(資料:kissコンテンツの一例;花)